

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「子どもは、間で育つ」



先日、ある特別支援学校中学部の各教科等を合わせた指導である生活単元学習の授業を参観しました。修学旅行で体験した創作活動を基に、「石けん作りをもう一度したい」という生徒の願い実現する単元でした。

本時は、よりよい石けんを作るために、体験コーナーとインタビューコーナーを設置した教室で、二人の先生方に試作品の石けんを使ってもらい、色、形、香りなどを尋ねて改良ポイントをまとめる内容でした。少し緊張しながらも一人目の先生のインタビューが終わり、二人目の先生へのインタビューを始めるとき、ハプニングが起きました。体調を崩した生徒の対応のため、予定していた先生がこれなくなったのです。想定外の出来事に生徒たちは動揺して不安な表情となり、授業に大きな「間」が生まれました。生徒と教師が突然できた「間」をどのように埋めるのか、本時の最大の山場です。

「間」を埋める方法としては、少し早いインタビューを終わりにして本時の振り返りをする、機転を利かせて別の先生にインタビューをすることなどが考えられます。生徒たちが教室の真ん中に集まり、何やら相談を始めました。授業者である教師は子どもたちが答えを導き出そうと考えている様子を見て、あえて指示は出さずに「間」を与えました。やがて、参観者の温かい雰囲気の後押しもあり、生徒たちが周りにいる参観者に視線をやり、一人の先生に、「インタビューをお願いします」という展開になりました。教師が「間」を与え、生徒が自分たちで考えて、「間」を埋めました。

授業では、上記のようなハプニングの他にも、板書をノートに書いているとき、発問をしたときなどに「間」が生まれます。特に発問した後、少し「間」ができると、不安になって、つい余計な話をしたくなります。子どもが考えようとしているのか、理解できずに困っているのかを見極めた上で、「間」をうまく使うことが大切です。「間」は子どもが自分と向き合いじっくり考える時間であり、友達の考えと自分の考えを比べる時間でもあります。子どもが育つ「間」になるように、子どもたちの視線（表情）や言動を見ながら、「間」の長さ、タイミング、思考を促す発問など、一手間を加えましょう。



とれたて直送便



☆「うちの子だけ名札が違うんですか？」

特別支援学級を希望している保護者から、「うちの子だけ名札が違うんですか」、「特別支援学級に入ると一日中、同じ学級で勉強するんですか」など、多くの疑問が寄せられます。各学校では、全ての児童生徒が同じスタートラインに立って学べるように、本人、保護者と合意形成を図った上で「合理的配慮」（例：補助プリントやワークシートの用意、クールダウンできる部屋の確保等）を提供していることを伝えています。子どもと保護者の小さな悩みに丁寧に応え、大きな希望をもって入学できるように、正しい情報提供に努めます。

